

文教大学生活科学研究所での話題提供
神楽公演の10年

handout 2017・3・22

○大学生とシニアが組んでの、公演ボランティア活動は、①公演内容はもとより、②公演準備から開催までのプロセス、③組織体制、④公演刊行物の内容と体裁など、つねに変化させながら実施してきたこと。

○さいたま芸術劇場を公演活動の本拠地としつつも、埼玉会館、国際交流基金日本語国際センター、慶應大学講堂、石巻市雄勝などで神楽公演を開催してきたこと。

○出演団体も県内から県外（神奈川県）から招くようになったこと。

○神楽公演に加えて、講演、展示、シンポジウム事業も開催したこと。

○公演終了後には、会計報告、事業報告、アンケート整理、大学でのボランティア論講義への参加などの活動があること。

*以上、実行委員会の活動の外形的な部分をお伝えしました。

さらに、この実行委員会の運営については、これまた、その年毎に微妙に違いますが、運営の「基本」（というか現状）についても報告しました。

○基本的にプリンシブルベースで、運営しておりルールベースになることを避けていること。神楽公演を多くの方々に楽しんでもらうことが大事、出演団体との交流をしっかりやる、というぐらいの意識を共有してもらっていること。ルールベースにはならないようにしていていること。

○ネガティブリストを採用して、活動の自由度合いができるだけ確保していること。予算が、つまり経費が発生する事柄については、事前に相談。それ以外は基本的に自由という考え方。

○公演回数が重なってきたことによって、ハイスタンダードにならないようにしたこと。同時に期待値も高くしないこと。毎回が初回公演という位置付け。

○大学別、各作業グループの「仕事ぶり、進捗状況」などについて

は、相互のグリップを強くしないで、お任せ状態を維持すること。

- インタラクティヴなミニケイションを積極的に採用しないこと。
- 多岐にわたる作業・経験があるが、活動中、積極的に共有に向かわないこと。SNSでアップする以上のこととはしない。
- ボランティアという曖昧性から脱して、プロボノ系へと移行すること。
- 活動成果をアウトプットぶりで評価しないで、それぞれがアウトカムを意識すること。実行委員会としてのアウトカムも大事だが、活動している、自分たちにとってのアウトカムが大切。
- 誕生した課題については、フィジリィビリティ（理想とか意義を語らないで、ひたすら実現性で勝負）を重要視すること。
- 失敗しても、神楽公演だから、さっさと気持ちを復元していこう。折れない気持ちで公演当日を迎えよう、そんな意味合いでレジリエンスを大切にしよう。
- お世話になった皆様とのエンゲイジメントを強く意識していこう。結果的に礼儀、お礼という気持ちを形で表現していこう、ということになる。

*以上のことを発表し、その後にディスカッションとなりました。
学生スタッフの経験談については、丁寧にお聞きくださいました。
時間をオーバーしての話し合いとなりました。